

## 四 十次とおび

比木神社ひきじんじやのかぐらまつりの日がやって来ました。十次はうれしくて、何日も前からまつりを楽しみにしていました。

「十次や、今日はおまつりだね。さあ、このおびをしめてお行き。」

「わあ、いいおびだなあ。ありがとう、お母さん。」

そのおびは、お母さんがはたおりきでおってくれた、新しいきぬのおびでした。

お母さんにおびをしめてもらった十次は、足どりもかるく神社へ出かけていきました。

大きなとりいのところまで行くと、二十人ぐらいの子どもたちが、わになって何かわいわいさわいでいます。

近づいてみて、十次はびっくりしました。みんなにとりかこまれて、今にもなき出しそうにしているのは、友だちの松三まつぞうだったので。

「今日はまつりだぞ。そんなそまつな  
おびなんかしめて。」

と、みんなにからかわれているのです。

これを見た十次は、りょう手で自分  
のしめているきぬのおびをぐつとにぎ  
りしめました。

十次は、しばらくじっとくちびるを  
かみしめていましたが、さつと自分の  
きぬのおびをほどくと

「このおびをしめるよ。」

と、松三の手ににぎらせ、松三のおびをほどくと、すばやく自分のこしにまきつけ  
ました。



「これでいいだろう。みんなはまちがっているぞ。」

と、きびしい顔つきであたりを見まわしました。みんなはだまりこんでしまいました。

「十次ちゃん、ありがとう。」

松三はなみだをうかべて十次を見つめました。

「いいんだよ、松ちゃん。さあ、行こう。」

二人はなかよくかたをならべて、神社の方へ歩いて行きました。

まつりからの帰り道、十次はおびのことを何と話そうかと、お母さんの顔を思い  
うかべながら歩きました。

家につくと、おかあさんはせつせとはりしごとをしていました。十次はおもいき  
つておびのことを話しました。

おかあさんは、しごこの手をとめてびっくりしたように聞いていましたが、話が  
おわると、やさしい目でうなずいてくれました。

おとなになってからの十次は、大じしんなどでお父さんやお母さんをなくした  
たくさんの子どもたちのめんどうをみました。子どもたちからは、

「お父さん、お父さん。」

としたわれ、五十さいでなくなるまで子どもたちのためにつくしました。